

相棒と歩む世界

自宅警備員候補生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いきなり現れた神と名乗る者に死亡フラグ満載のハイスクールD×Dの世界に、暇つぶし半分で連れてこられた男子高校生相模礼。

特典として与えられたのはあるドラゴンが封じられた神器だった。

封じられしドラゴンと共に歩み、死亡フラグ満載のハイスクールD×Dの世界を生き抜く物語が始まる。

目次

第4話	16
やらかし	13
転校と遭遇	7
第一話	1

第一話

「最悪だろ、マジで…。」

俺、相模さがみ 礼らいは今テンションが凄く下がっている。

その理由は神と名乗る奴がきなり俺の前に現れたかと思うと手足を縛られ、視界を奪われ何処か分からないところに連れてこられたからだ。

体感にして五分もたっていないから俺がいたところからそう離れていないと思っていたが神と名乗った奴からだと思う手紙を見てその考えは間違っていたと分かった。

手紙の内容は以下の通りだ。

『やつほく、どうもどうも神様だよ。』

いや、いきなり現れて拉ひげふんげふん、連れて行いっちゃってごめんね☆！

実はさく、最近とてもとても暇でねえ。

何か面白いことないかな？って思っていたところに二次小説って存在をししっちゃって、――

転生した人間が実際にどんなことをするのか？ってふと思っ

ちやつて(●、ω、●)

なんやかんやで君にハイスクールD×Dの世界に拉ひげふんげふん、招待したってわけww

まあ、簡単に死んでもらってはつまんnー可哀想だからこの世界で

言う神セイクリッド・ギア 器を渡してるから(●、o、●)

あと魔力も上級悪魔ぐらいにはあるから大丈夫だよ？(U、V

、)

ってことで僕を楽しませてね、(、o、)

それじゃあ、頑張ってるね。

応援しているよ(、・ω・、)

と、今どきのおつむの緩い女子高校生か！って突つ込みたくなるような顔文字の量の手紙を残していきやがった。

確かに少しは異世界転生とか、アニメや漫画の世界に行いってみたい

とは思ったことはあるけど何の説明もなく連れてこられたから混乱しているし、神と名乗った奴を一発ぶん殴りたいと思っってしまった。しかし問題はそこじゃないんだよな。

この世界がああ死亡フラグ満載のハイスクールD×Dの世界だつてことだ！

ただ神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアを持っているというだけで墮天使に殺されたり、悪魔に無理やり眷属にさせられるような人間にとつては最悪な世界。

それなのにあの神と名乗った奴は俺に神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギアと上級悪魔ぐらいの魔力を渡したと書いてやがる。

俺は平和に生きてきたくて前居た世界でいい意味でも悪い意味でも有名にならないように生活してきて何の不自由もなかったというのに、このハイスクールD×Dの世界で神セイクリッド・ギア 器セイクリッド・ギア持ちは碌な人生を送らないと言うのに…、それなのにあの神と名乗った奴はあああああ!!!

俺は行き場のない怒りを抑えながらもこの死亡フラグ満載の世界を平穩に生き抜こうと決め、自分の置かれている状況を理解することにした。

「ひとまずはここがハイスクールD×Dの世界での何処にあたるか調べないと。」

だがそれについての答えはすぐにわかってしまった。

俺のいる空間、部屋には明らかに兵藤一誠や木場裕斗が着ていた駒王学園の男子生徒用の制服と生徒手帳らしき物が置いてあった。

しかもその制服の胸ポケットに、また手紙が入れてあった。

『どもども、再び神だよ☆！』

君には駒王学園に転校生として通って貰います(・ω・ノ)ノ
時期的には丁度兵藤一誠君が悪魔になったばかりだよ。

ではでは(・o・ノ)』
ビリッ

思わず力を入れてしまい手紙を破ってしまったが、神(自称)へ対する怒りが余計にこみ上げてきた。

今が兵藤一誠が悪魔になったばかりということ、この町に墮天使

やはぐれ悪魔祓い、はぐれ悪魔がうようよいるってことになる。

しかも俺は神セイクリッド・ギア器キ持ちだから（どんなのか知らないが）殺されるかもしれないのに、更に魔力も普通の人間では持つていない量を持つていうため俺が余計に殺される可能性が高い。

自分の身は自分で守らないといけない。

そのためには戦う手段を確立させないといけないが、神セイクリッド・ギア器キの発現の仕方もうろ覚えだし、魔力の使い方もほとんど知らない。

現状戦う手段が神セイクリッド・ギア器キと魔力しかないのにその使い方を知らないなんて積みゲーもいいとこだ。

「うろ覚えでも、ほとんど知らなくてもとりあえず出来ることは全て試してみないと。」

自分の命がかかっているから、そう思い続けながらもまずは神セイクリッド・ギア器キを発現させる。

原作で兵藤一誠はドラグ・ソ・ボールのドラゴン波のまねをして発現していたから、おそらくは強いイメージが大事なんだろう。

自分の中で一番強いと思うものをイメージしないと…。

「俺の中で一番強いと思うのは…。」

原作の兵藤一誠も強いと思うが、俺の中では一人に決まっている。

百人の魔物の子のなから魔界の王を決める戦いで優しい王様になることを胸にパートナーともたちや仲間と共に戦い抜き魔界の王になった一人の魔物の子。

弱虫と言われても、なんと強敵にやられようとも何度でも立ちあがり仲間のために戦った心優しきまさに王の器を持った…ガツシユ・ベル。

ガツシユ・ベルこそが俺の中での一番強いと思っている。

ガツシユ・ベルの戦う姿をイメージしながら俺の中に眠る未知なる力を呼び出す。

「バオウ・ザケルガ!!!」

シン級呪文を除いた中でガツシユ・ベルの最強呪文である雷の龍を呼び出すバオウ・ザケルガ。

思わず熱が入り叫んでしまったが、それが良かったのかどうかは分

「からないが俺の神セイクリッド・ギア器が発現した。」

「両手に赤龍帝の籠手のような籠手がはめられているが、赤龍帝の籠手より装飾は派手ではなくガントレットに宝玉が一つ埋め込まれており、背中には白龍皇の光翼のような翼がはえていた。それ等は全て赤龍帝の籠手の赤色でもなく白龍皇の光翼の白色でもなく黒味がかつた紫の色をしていた。」

『ふっ、ようやく神セイクリッド・ギア器を目覚めさせたか。』

「両手の籠手の宝玉と背中の翼が点滅しながら渋く威厳のある声が聞こえてくる。」

「お前は、誰だ？」

『俺か？俺は大した力ももっていないドラゴンの中でも弱い部類に入る名も無きドラゴンだよ。お前の神セイクリッド・ギア器に宿っているな。』

「驚いた、名も無いドラゴンとはいえ俺の神セイクリッド・ギア器にドラゴンが宿っているとは思ってもいなかった。」

「なら、お前の宿る神セイクリッド・ギア器の名称とその能力はなんだ？」

『神セイクリッド・ギア器の名は増減龍の籠翼。能力は自分の力を倍増するのと触れた相手の力を半減する。』

「ということは赤龍帝の籠手と白龍皇の光翼の力が合わさったってことか？」

『何故お前が赤龍帝と白龍皇のことを知っているかこの際置いておくが、お前の考えているような優れているわけではない。倍増も半減も二回だけしか出来ん。神滅具ロンギヌスの二つのようなたいそれたモノではない。増減龍の籠翼も数は少ないとはいえ他にあるのだから。』

「お前のような存在がそれ等に宿っているのか？」

『ああ、元々俺達は増減龍と呼ばれる数が少ない希少なドラゴンだった。世界に五体しかいなかったな。だがある時聖書の神が俺達のもとにやってきて神セイクリッド・ギア器の中に封じ込められた。俺達増減龍は倍加と半減の二つの力を持っていて前々から危険視されていたんだよ。能力は赤龍帝と白龍皇の二体が合わさったようなものだがドラゴンとしての力はワイバーンと同等だった。まあ、倍加と半減を駆使してトータル的には上位のドラゴンに数えられたがな。』

「何故、お前達が封印されなければならなかったんだ？」

確かに増減龍の力は強いが数が少ない希少なドラゴンだったのに、封印されなければならなかったのか理解が出来ない。

『さあな、その真意は聖書の神しか知らないだろうな。まあ、考えられる一つの理由はドラゴンだからだろうな。』

ドラゴンは力と強さの象徴と昔からされ、他種族からは畏怖されてきた。

ドラゴンの中には邪龍と呼ばれた人間や他種族に害をなすドラゴンたちもいたし、天使、墮天使、悪魔の三竦みの戦争に乱入したドラゴンもいた。

ドラゴンと言うだけでさまざまなことがその身に降り注いだ。

「聖書の神を恨んでないのか？」

『別に恨んでなどいない、どうせ五体しかなかったんだ。その内勝手に滅んだだろうよ。だがこうして神セイクリッド・ギア器の中に宿っていれば毎回退屈せずに済むからな。もともと倍加と半減二つの力を持っていた俺達はドラゴン族の中でもはぐれだった。戦いにも興味のない変わったドラゴンだったんだよ。』

話を聞くとドラゴンらしくらぬドラゴン、という印象を受ける。

「そうか、お前は変わった奴だな。」

『よく言われる。それよりお前に聞きたいことがある。』

「なんだ？」

『何故、お前のような一般人が赤龍帝と白龍皇について知っている？』

それにお前が何故上級悪魔レベルの魔力を持っているのだ？』

神セイクリッド・ギア器に宿るドラゴンに尋ねられた俺は包み隠さず俺がこの世界の人間ではないということ話を話した。

神と名乗る奴にこの世界に連れてこられたことも。

『なるほどな、それならば一応納得が出来る。しかし、随分と災難だったな。』

「お前ほどじゃないけどな。俺はアイツをぶん殴りたいが別にそれほど恨んではないからな。」

『ふははは！お前面白いな。否、今代の宿主よ。』

「礼^{らい}だ。俺のことは礼と呼べ。相棒。」

『ふつ、いいだろう！礼、せいぜい生き延びようぞー！』

「当たり前だ、そう簡単に死ねるかよー！」

こうして俺と相棒のこの世界での戦いが始まるのであった。

転校と遭遇

「ところで、相棒。魔力の使い方、言えば魔法について教えてくれないか？」

神（自称）から上級悪魔レベルの魔力をもらったのはいいが、使い方を知らずに使えなければ宝の持ち腐れもいいところだ。

身体能力が一般人並しかない俺は神セイクリッド・ギア器である増減龍ブースディング・パーツの籠翼と魔力を用いて人外達と戦わなければならない。

本当は人外達とは戦いたくはないけど、増減龍ブースディング・パーツの籠翼を持っている以上戦うことになる。

『魔力の使い方か……。俺もあまり知らんが知っていることなら全て教えよう。』

「ありがとな！相棒！」

『よい、礼は俺の相棒だからな。そう簡単に死んでもらっては困るだけだ。』

言葉は少しひどいが俺のことを心配してくれているのは、神セイクリッド・ギア器を通して伝わってくる。

『元々魔力とは悪魔が行使する力だ。実際に使うためにはイメージ力が大きく必要になる。』

「イメージ力？」

『大まかに言えば創造する力と想像する力ということだ。頭の中でどんなことをしたいのか、それを想像してそれを基に魔力を通して実体化させ魔法にする。結局のところセンスが問われる部分が多いということだ。』

「魔力を通して実体化？」

『魔力を通して想像したものの出すということだ。例えば火を出したいなら頭の中で具体的に【火】というものを強くイメージするのだ。そうしたら魔力が反応して火が出る。その辺のサポートは俺がやれるから礼はただイメージするだけでいい。あと何か呪文みたいなのを作ればより簡易的に魔法が使える。つと俺が知っているのはこれだけだ。歴代の所有者に魔法を使っていた者がいなかったからようは

分からんがな。』

とりあえず俺は実体化させたいものをイメージしたらいいんだな。

「イメージするのはなんでもいいのか?」

『ああ、火でもいいし、水でもいいし基本的にはなんでもいいさ。礼の魔力の範囲でな。』

なら俺は決まっている。

前の世界で見えていつか使ってみたいと思っていたものがある!

「こういうのも可能か?」

セイクリッド・ギア

神器を通して相棒に俺のイメージを伝える。

『ふむ、これが相棒の言っていた前の世界での力か?』

「空想の世界の力だけだな。ずっと憧れていたんだよな。でき、可能なのか?」

『普通にできるが、その前に結界を張らねばならんだろう。』

「結界?なんでだ?」

『結界を張らぬまま魔法を使えばこの部屋がなくなるぞ?それとこの地にいる悪魔に気付かれるのではないのか?』

相棒に言われて俺はハツとする。

確かに結界を張らないで魔法を使ったらこの部屋どころか近所の人達にも迷惑になる。

さらにこの町にいる悪魔や堕天使にばれて殺されるかもしれない!?!?

「相棒!!俺に結界の張り方を教えてくれ!!!」

『もとよりそのつもりだ。というか言われずに気付くべきであろう? 礼よ。』

相棒の言葉が俺の心に深く刺さる。

「言葉がありません、はい…:。」

『単純な結界なら魔力のある者ならだれでも出来る。ただドーム状のモノをイメージするだけでいいからな。』

「え?それだけでいいのか?」

『あとは俺が人払いと魔力を漏らさないように上書きするから、礼はただイメージしていればよい。』

相棒に言われ頭の中でドームをイメージする。

すると部屋を包むような結界が張られた。

「おお！流石は相棒！何から何までありがとな！」

『それより早く魔法を使ってみたらどうだ？あまり時間がないぞ？』

相棒に言われ部屋にある時計を見ると夜十一時を回っていた。

「うわー、まだ夕飯も食ってねえし風呂もまだだし。転校初日から近くは印象悪いよな。」

睡眠時間などから逆算してもあと三十分程度しか時間は残っていなかった。

「さてと、集中してやりますか！」

それから熱中してしまい魔力が切れるまで魔法の練習は続いてしまった。

「ふあ、ねむい…。」

『礼が夜遅くまでやるからいけないのであろう。』

「うるせえよ。つと。」

つい部屋の中のように声に出して喋ってしまい、登校中の他の生徒に見られてしまった。

昨日、と言うか今日の朝にリュウイグ（昨日に一緒に名前を決めた）に念話の仕方を教えてもらったのにすっかり忘れていた。

（つたく、それよりも学園内では極力 セイクリッド・ギア 神 器のオーラを抑えていてくれよ。）

『当然だ。俺のことより自分のことを心配したらどうだ？ 魔力に関しては自分で抑えるしか出来ないのだから。』

一応リュウイグに魔力の抑え方を教えてもらったがこれが難しく中々抑えることが出来なくて、今は何とか中級悪魔レベルにまでは抑えている。

それでも学園の悪魔達は気付いてしまうだろうから、寝ていないのも合わせり憂鬱な気分になっている。

『そういうしている内に学園についたようだぞ。』

（んじゃ、よろしく頼むぞ。）

『分かった。』

気を引き締めて学園に入り、職員室に向かう。

入口から五分ぐらいあるいたのだがどうやら完全に迷ってしまったようだ。

（駒王学園広すぎるだろ…。）

『確かにな、普通の学園よりは二、三倍ぐらい大きいだろう。』

指定された時間をもう五分遅れているから、これ以上遅れるのは印象が悪い。

そこから少し歩いたところでようやく職員室を見つけたことが出来た。

「すいませーん、今日からこの学園にお世話になる相模礼ですけ

ど…。」

「おお、君が相模君か。待っていたよ。」

出迎えてくれたのは優しそうなジャージをきた見た感じ体育教師だった。

「遅れてすみませんでした。」

「大丈夫だ！何かあったのか？」

「いや、職員室に来るまでで道に迷いました…。」

「はっはははは！この学園に初めてきた人達のうちの四割ぐらゐは迷うからあまり気にするんじゃないぞー！」

どうやら俺だけが迷っているわけじゃないらしい。

「さて、相模君もきたとこだしクラスに案内するかな！」

「よろしくお願いします。」

「うむ、ではついてきた前！私の名前は寺戸だ！」

寺戸先生の後ろをついていくと俺のクラスに案内される。

「クラスみんなに紹介するからすこし待っていてくれ。」

そういうと寺戸先生は教室の中に入って言った。

「よーし、お前達皆揃っているな！今日からこのクラスに新しい仲間が増えるぞー！」

「先生！美少女ですか?!?!」

「おっぱいの大きい女ですか?!?!」

「いや！ここはちっちゃい合法ロリ美少女だろ!!!」

なんか否な気配がしてきた、主に主人公とその愉快的仲間たちの気配が…。」

信じたくない事実を突きつけられたようなそんな気分になっているが、まだ気のせいだと思いたい！（現実逃避）

「おいおい、松田、兵頭、元浜。自重しろといつもいつているだろう？」

変態三人衆の聞きたくない名前を寺戸先生が言った瞬間に俺はその場に倒れたくなった。

「まあいい、さっそく紹介するぞー！相模君、入ってきてくれ。」

寺戸先生に呼ばれ重い足取りで教室に入っていく。

「えー、今日からこのクラスの仲間になった相模礼君だ！相模君、皆に

一言頼む！」

「今日からこのクラスに転校してきた相模礼です。趣味は読書。今日からよろしく。」

当たり障りも無く普通のあいさつをする俺。

こういった自己紹介の場で笑いを取りに行くほど俺は馬鹿じゃない。

「はい！質問いいですか!？」

誰だか分らん男子に言われ、先生のほうを向く。

「そうだな、どうせなら一時間目まで続けて相模君への質問タイムだ！」

そのあと精神的にも肉体的にも披露したのは言わずともだ。

やらかし

「つ、疲れた……。」

自己紹介後の激動の質問タイムが終わり自分に割り当てられた机に突っ伏す。

質問の数が多いのはそれほど俺に興味があるって思えるけど、それを差し引いてもめっちゃくちや疲れた。

質問の内容も好きな食べ物だとか、休日は何してるだとか、部活は何にするだとか予想していたものが大半だったが一部そうはいかなかった。

案の定松田、元浜、兵藤がかましてきやがった。

三人そろって俺を変態三人組の仲間に入れようとして、普通女子の前で発言するようなものじゃないNGワードを連発してきた。

まあ、寺戸先生におてっけんしんどう話されておとなしくなったが……。

『しかし、災難だったな。礼よ。』

(まあ、転校生の通る道だよ。リュウイグ。)

『そうかもな。だが、あの集団の中に悪魔が一人いたな。』

リュウイグの言っている悪魔は兵藤のことだろう。

俺をここに連れてきた奴の手紙にも兵藤が悪魔になったばかりだと言っていたから。

(知ってる。うっすらとだけ周りと感じる気配が違うから。)

魔力を使えるようになってから、微妙にだけ気配というのを感じれるようになった。

人間は人間の、悪魔は悪魔の気配がリュウイグ曰くあるようだけど悪魔の気配を兵藤一人しか感じていないからなんとも言えないがな。

『この学園の中には十を超える数の悪魔がいるな。それも上級悪魔が。』

(リアス・グレモリーとソーナ・シトリーだな。)

『礼の言っていた原作知識とやらが正しければな。だが今の礼では敵わない相手だからうかつに近づくんじやないぞ。』

(分かっているさ。命も惜しいしね。)

今の俺はリュウイグ曰く下級悪魔よりちょっと強いだけらしい。

神器と上級悪魔レベルの魔力があるとはいえ、戦闘経験が0だからいざ戦闘になれば何も出来ずに負けるがおちだ。

増減龍の籠翼ブースティングの能力の一つの半減も相手に触れないといけないし、倍加も十秒またなきやならない。

しかもそれぞれ二回までという制限もあるし、一対一なら勝てても多対一だと何も出来ない。

あと一日二日あれば魔力を使ったアレが出来るかもしれないから、また話は変わってくるだろうけど今は兎に角近づかない方が身のためだ。

『まあ、いざとなれば人間をやめて龍人になればいいではないか。俺に対価を払ってな。』

(冗談じゃないって、俺は人間をやめる気はないしましては龍人になんかなるかっての!... けど、本当にどうしよもない時は片腕ぐらいは払うけどね。)

『片腕は払うつもりあるのか?』

(流石に死にたくはないからな。片腕だけで命が助かるなら俺は喜んで払うさ。)

『しかし、礼。お前やらかしてしまった。』

(どういうことだ?)

『今、お前は魔力を漏らしているぞ? 一難去って気が緩んだか?』

リュウイグの言葉に俺はただらと冷汗がとめどなく出てき始めた。

隣の席の女子生徒がいきなり冷や汗を流し始めた俺を不審に思い声をかけてきた。

「相模君、顔色が悪いけど大丈夫?」

「だ、大丈夫だ... と思う。」

さらに冷や汗を流しながら俺は答えるがそれが余計に心配させたのか隣の席の女子生徒は先生に声をかけた。

「先生! 相模君が具合悪そうにしています!」

(余計なことをオオオオオオ!)

『礼、また魔力が漏れたぞ。今度は完璧にばれるぐらいのな。』

「何!?!それは本当か!?!相模!」

女子生徒に呼ばれて寺戸先生が俺のそばまで来て、肩をつかみ揺らしながら尋ねてきた。

喋ろうにも体を揺らされて上手く喋れないどころか胃の中がシエイクされてはきたくなってきた。

「先生!?!それじゃあ相模君が喋れません。」

誰だか分らんが先生を止めてくれてありがとう、そう思って礼を言おうとして俺は意識を手放した

第4話

「ここは、どこだ？」

寺戸先生に肩を揺らされ気を失った俺は目覚めると知らない場所にいた。

「あら、目が覚めたかしら？」

声のする方を見ると紅髪でスタイルのよい一人の女子生徒がいた。

「あれ？なんで目の前にリアス・グレモリーがいるんだろう？あ！これは夢だ！もう一度寝よう！」

現実から目をそらしながら俺は再び寝ようとするのを止められた。

「この状況で普通二度寝するかしら？」

「えっと、どちらさままで？」

他人の空似という一縷の望みをかけて名前を尋ねるがそれはすぐに打ち砕かれた。

「私の名前はリアス・グレモリー。貴方の先輩にあたるわ、相模礼君？」

「で、そのグレモリー先輩は何故俺の名前を？それより何故ここにいらんですか？」

「胸につけている名札を見れば名前ぐらい直ぐにわかるわ。それに私がここに居るのは貴方に興味があるからよ。」

（って言っているけどどう思う？リュウイグ。）

俺は神器を通してリュウイグに語り掛ける。

『ほぼ百パーセントの確率で礼が漏らした魔力の件だろうな。』
（やっぱりかー、ほんとにやらかしたわ。）

いまさら後悔しても遅いが俺は少し前の自分を恨んだ。

「まあ、今ここで話しても時間が足りないから放課後に使いをだすわ。」

「あ、はい。」

つい状態反射で返事をしてしまった。

「では、また放課後に会いましょう。相模礼君。」

素晴らしいリアス・グレモリーはこの場から出て行った。

「そう言えば、ここってどこだ?」

『保健室という場所だ。担任の教師が礼を担いで運んできたのだ。』

俺の体重がざっと六十五キロだから、それを考えると寺戸先生はものすごい力持ちで体力を持っていることになる。

(寺戸先生って少し人間止めてないか?)

『たぶん止めているだろうな。礼を担ぎ、走りながら会談を降りてここにつくまでに息切れ一つすらしていないなかったからな。』

どうやら俺等の担任は人間という枠組みを飛び出しているようです。

『保健室にいた白衣をきた人間も特別驚いている素振りも見せてなかったから、日常的な出来事なのだろうな。』

(寺戸先生は人間を別の意味で止めてないよな? 悪魔になっているとか?)

『それはないな、あの男からは悪魔の気配を一切感じられなかったからな。純粹に人間を止めていることになるな。』

(あの人悪魔に誘われてもおかしくないよな。。。俺なんかより絶対に。)

『そうとも限らんさ、礼に限界はないがあつ男には限界があるからな。だが、それよりも速く教室に戻った方がいいのではないか?』

リュウイグに言われ腕時計を見てみると俺が気絶してから約二時間近くたっていた。

「やばっ?!?!急いで教室に戻らねえと!!」

保健室を飛び出し俺は急いで教室に戻った。

その後は特に変わったこともなく時は過ぎて放課後になった。

(さて、リアス・グレモリーが使いを出すっていったが恐らく来るのは木場佑斗だろうな。まだ教室に兵藤一誠がいるし。)

そう考えていると教室の入り口の方から女子の悲鳴に近い声が聞こえてきた。

「やあ、兵藤君に相模君はいるかな?」

笑顔のイケメンフェイスで木場佑斗がやってきた。

「え!!まさか木場×兵藤!!」

「いいえ！ここに謎の転校生相模が加わって、木場×兵藤×相模よ!!」
「兵藤×相模×木場かもしれないわ!!」

木場の一言で爆弾が投下されたかのように教室に残っていた腐女子達が騒ぎ始める。

「おい木場！速く俺達を連れていけ！」

「きやあああああ！連れていけですって!!??」

「これは夏が楽しみなってきたわ！」

余計な兵藤の一言でさらに腐女子達が騒ぐ。

「あ、うん。とりあえず付いてきてくれるかな？」

「いいぞ」

俺と兵藤の声が重なる。

その言葉を聞き木場はどこかに向かって歩き始め、俺と兵藤もそれに続いて歩き始める。

(まあ、行く場所は旧校舎のオカルト研究部の部室だろうがな。)

予想通り木場は旧校舎まで歩き一度歩を止める。

「なあ、木場。ここにリアス先輩がいるのか？」

「そうだね、ここにリアス先輩がいるよ。」

「それでなんで俺と相模はここに連れてこられてるんだ？」

「さあね？僕は何も知らないね。ただリアス部長に二人を部室まで連れてくるように言われただけだから。」

そういうと再び歩き始め旧校舎の中に入っていった。

(完全に俺空気の扱いじゃね?)

『俺も手伝えばここからあの悪魔の男に気付かれなくて立ち去れるがどうする?』

(今日のところは撤退したいな。まだ十分な準備が終わってないし。)

『了解だ。魔力を地面に流せ。そのあとは俺がその魔力を使って転移の魔法陣を描く。それと同時にばれないように結界もはる。』

リュウイグに言われたとおりに地面に魔力を流し、転移の魔法陣を描いてもらい俺はこの場から立ち去った。